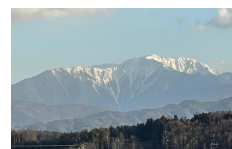


ああ 遠くの空は 晴れている



NO2

南箕輪村教育委員会

第2号では、広報みなみみのわ に令和7年12月号から掲載している「あたたかな まなざしで」を紹介します。初回は、尾形教育長です。

【発行の趣旨】

村報「みなみみのわ」に、子育てに関する情報提供コーナーを設け、子どもにとって大切な学びや経験について考えたり、日頃の子どもの関わり方を振り返ったりする契機にしたいと思います。小中学生の子育て中の保護者に限らず、これから保育園に入学するお子さんの保護者、子育ては終わったが改めて子育てについて考えていただける世代の方々からお年寄りの方々まで、**村民全体で子育てについて考え合うコーナー**を創っていかれたらと思います。

(次回予定) 令和8年 2月号 南箕輪小学校 松崎校長が執筆します。

「地域の中で 仲間と共に 自分を磨く」ために、子育てについてみんなで考えていきましょう

あたたかな まなざしで

No.1

人は「温かい言葉をかけてくれた人」の存在は忘れない

教育長 尾形 浩



今から13年前、私の父は86歳で逝去しました。山形県鶴岡市出身。水呑百姓の親戚に訳あって預けられた身。縁あって駒ヶ根で精肉業に就き、70歳で引退した後、約10年間、造園業に携わった働き者の父でした。小学校4年生の仙台への修学旅行には貧乏ゆえに、80人の同級生中4人が行けなかったうちの1人であつたと孫に話していた父。

「お前たちは修学旅行に行けていいな。おじいちゃんも修学旅行、行ってみたかったな。」遠く故郷を眺めながら呟いていました。

そんな父が亡くなる1年前に、駒ヶ根市の中沢にあるハナモモの里に一緒に出かけた時のことです。山の斜面いっぱい咲いているハナモモの花を觀賞して帰途につき、ある一軒の農家を通りかけた時、ふいに父がつぶやきました。

「昔この農家の家に、農作業を手伝いに来たことがあつた。当時、お昼になると農家の人は家の中で、手伝いに来た人は外で弁当を食べているのが普通だった。その時、この家の、今では亡くなったおばさんが、『尾形さん、こつちに来て一緒にお昼食べましょ』と声をかけてくれ、仲間に寄せてくれた。あの時は本当にうれしかったな。」

これだけの話ですが、父はその農家のおばさんのかけてくれた、たった一言を60年経っても覚えていたわけです。人は、「温かい言葉をかけてくれた人の存在は忘れない」。私が父の一言から学んだことです。父の葬儀の喪主挨拶でも、この話をさせていただき、多くの方にお世話になった感謝の気持ちを述べました。

人は、人の優しさにふれた時、気持ちが温かくなります。人に優しくできる人の「評判」は必ず上がります。その評判が、実は自身自身の人生を支え助けてくれます。逆に「悪い評判」につながる言動は、自らの生き方を狭め苦しめます。「よい評判が自分を助けてくれる」はず。私はそう思います。

各学校で、よいクラスを創るのは、自分たち一人ひとりです。自分の人生の主人公は自分自身です。「なりたい自分」になるためにも「温かい言葉」をかけることのできる自分自身でありたいものです。温かい気持ちをもった優しい南箕輪村の子どもたちであってほしいと思います。

【このコーナーは、偶数月に、教育委員会スタッフと小中学校の担当者が交代で執筆していきます】